

研究ノート

「セクシュアリティ」概念を／とともに考える

大村優介

1 はじめに

人類学者ゲイル・ルービンは1984年の論考「性を考える」において、「セクシュアリティに特化した独立の理論と政治」(Rubin, 1984/1993, p. 34)を打ち立てることを主張した。このルービンの意図は、その後「セクシュアリティ研究」という領域の確立として十分に実現されたように思われる。しかし「セクシュアリティ」という概念には、どこか茫洋とした感覚がつきまとう。この概念を用いて様々なことが語られているにもかかわらず、では一体「セクシュアリティ」の内実は何かと問われると、はっきりと述べることは難しい。本論文はこの感覚を出発点とし、「セクシュアリティ」という概念を有益に用いるための方策を検討する。しかしここで目指されるのは、同概念の定義を確定することではない。以降の議論で筆者は、人文・社会科学を中心とする様々な記述における「セクシュアリティ」概念の用例、概念の定義や性質に関する諸議論を紹介し検討していく。そして主に人類学の議論に依拠しつつ、概念の可動性を活かした概念との向き合い方を模索する。本論文の以下の4つの節では、各々異なる観点から「セクシュアリティ」概念に関わる議論を行う。

まず第2節ではルービンの「性を考える」での議論を出発点とし、「セクシュアリティ」概念と、「ジェンダー」や「性的指向」などの概念との関係に注目する。そしてルービンが論じたように、「セクシュアリティ」という語が、これらの概念と密接に関わりつつも、なお独立した概念として維持される必要性について検討する。それを受けて第3節では、「セクシュアリティ」という語が「性的である (sexual)」という形容詞の名詞形であることを念頭に置き、「性的である」ことをいかに定義するのかに関して議論を進め、「セクシュアリティ (=性的なこと)」の意味内容が、制度的・集合的に共有される可能性を持ちつつも、なおもそれを逃れ多様化する側面を持つがゆえに定義し難いことを論じる。続く

第4節ではいったん議論の射程を広げ、人間の生の諸問題を対象とする学術的実践において概念を創造的に用いる可能性を、人類学者マリリン・ストラザーンの議論に主に依拠しつつ探究する。そして第5節では、学問的実践とその対象たる現象とが相互に変容し、構成される中で見出される「経験」の側面を捉え損わないために、「セクシュアリティ」概念を用いる可能性を模索する。

2 ジェンダー、性的指向、セクシュアリティ

論考「性を考える」においてルービンは、「セクシュアリティ」と「ジェンダー」とが異なる「社会的存在」を指し示すものであり、分析概念として分離して捉えられる必要があることを強調している (Rubin, 1984/1993, pp. 33-34)。しかし、このルービンの主張の捉え方をめぐっては慎重さが求められる。例えばジュディス・バトラーは、ルービンの論考が「レズビアン・ゲイ研究とフェミニズム研究との方法論的な分離」を求めるものとして読まれるべきではないことに注意を促している (Butler, 1994, p. 9; cf. Martin, 1994)。

「性を考える」でルービンは、近代以降の西欧社会、特に第二次大戦後のアメリカにおける「逸脱」した性への抑圧という、歴史的・社会的に特定の事態について論じている。ルービンの議論の要点は大きく分けて二つある。一点目は近代の西欧における性の階層化であり、そこでは多様な性のあり方が「良い、正常なもの」と「悪い、異常なもの」とに分けられ、後者が周縁に置かれ規制や処罰の対象となる。そして二つ目の論点として、既に述べたような「セクシュアリティ」と「ジェンダー」の概念としての区分けがある。ルービンのこの論考はポルノグラフィやSMをめぐるフェミニストの間での論争の中で書かれたという時代的背景を含めて理解される必要があるが、特にここでは、ルービンの議論における「セクシュアリティ」という概念の内実に注目したい。

ルービンは第一の論点である性の階層化を円形の図を用いて示している (Rubin, 1984/1993, p. 13)。大小二つの同心円からなる図に記されているのは、「同性愛／異性愛」などの、どのジェンダーまたは解剖学的性別の相手に性的に惹きつけられるかという (狭義の) 性的指向だけではない。例えば「身体のみ／モノ (性具) を使ったの」や「ノーマルな、ありきたりの性行為／SM」、「家で／公園で」、「同じ世代／異なる世代間での」、「カップル／独りもしくはグルー

ブ」などの対が示され、各々の組み合わせのうち前者が中央の「良い、正常な性」、後者が周縁の「悪い、異常な性」に振り分けられるという構造になっている。ルービンはこれらの指標を含む性の現れ方を含めて、「セクシュアリティ」の問題を考えていたのである。

ルービンの議論を受けつつイヴ・セジウィックはより明瞭に、「セクシュアリティ」概念の位置づけについて論じている (Sedgwick, 1990, pp. 27-35)。セジウィックは、20世紀に「セクシュアリティ」という語の意味が同性愛－異性愛の対立軸へと狭まっていったのは事実であるとしつつも、「性的選好 (sexual choice)」には例えば「自己性愛的－他者性愛的 (auto- or allo-erotic)、世代内－世代間、種内－種間」(Sedgwick, 1990, p. 31) などの側面も存在し、それゆえ「セクシュアリティ」は「選ぶ対象のジェンダーのみによって表現されるのではなく、多くの側面に渡って展開している」(Sedgwick, 1990, p. 35) と指摘する。セジウィックのこの説明は、ルービンが「セクシュアリティ」概念を、(同性愛－異性愛の対立項としての)「性的指向」の分析軸のみでは捉えきれない、複雑性と幅を持った現象を指す語として用いていたことに気づかせてくれる。さらにセジウィックは、「セクシュアリティ」に含まれる現象と「ジェンダー」との関係が、同性愛や異性愛の概念と「ジェンダー」概念との間に見られるような「明白な定義上の関係」であるとは限らないとも述べている (Sedgwick, 1990, p. 31)。バトラーも指摘するように、ルービンは、「セクシュアリティ」と「ジェンダー」とが単一の原理では理解できない「非還元的、非因果関係的な」(Butler, 1994, p. 9) 形で絡み合っていることを示唆していたのである。

以上の概念をめぐる考察を、現代の人類学的研究と合わせて考えてみるとどうなるだろうか。人類学者のドレッジ・カン¹は2000年代半ばから2010年の調査に基づき、タイ、バンコクの中流階級のゲイ男性たちの中で、韓国や日本など東アジア出身の「白いアジア人 (white Asians)」(Kang, 2017, p. 189) が理想的なパートナーと見なされている傾向について分析している¹。カン¹は経済発展の度合

¹ これはあくまでステレオタイプ的な理想に基づくものであり、理想と実際とのギャップに落胆する者もいる。例えばカンは、日本人男性と付き合ったものの相手は忙しさを理由に会ってくれず、結局別れてしまった男性の事例を紹介している (Kang, 2017, p. 201)。しかし彼がそれでも「日本人男性」に興味を示し続けるように、かれらの中の理想、イメージがそれ自体として強い力を持っていることも事実なのだ。

いから想起される進歩性の感覚がかれらの欲望に介在していることに注目する (Kang, 2017, pp. 202-203)。ここでは経済変動、メディアなどを通したトランスナショナルな相互作用、エスニシティの認識などが、男性ジェンダーの感覚や男性同性愛的欲望が生成・変容する局面に緊密に関わっている。しかしよく考えてみればカンの紹介する事例は特殊なものではなく、われわれが「性的指向」などの概念で捉える性愛のあり方は、常に既に、「エスニシティ化」されており、経済的なものやメディアイメージを含んでいるとも考えられる。

一方、現代アメリカにおける「トランスジェンダー」というカテゴリーをめぐる著作において人類学者のデイヴィッド・ヴァレンタインは、研究者や活動家が「ジェンダー」や「セクシュアリティ」などの語の意味についての自らの前提を持ち込んでしまうことで、「それらの語のオルタナティブな意味が消えてしまう」ことに懸念を示している (Valentine, 2007, pp. 17-18)。例えば「自分は『ゲイ (gay)』であり、『女性』である」 (Valentine, 2007, p. 3) と述べるフィオナは、女性としての「ジェンダー化された」生と、ゲイとしての「性的な」欲望との間に「存在論的な区別」を設けない (Valentine, 2007, p. 4)。ヴァレンタインは、「ジェンダー」と「セクシュアリティ」が「交差している」のか、「区別されるべき」なのかという類の議論が、フィオナのような人々の感覚から離れたところで展開されがちであることに注意を促す (Valentine, 2007, p. 61)。そしてこれらの概念は、「われわれが『ジェンダー』や『セクシュアリティ』と名づける生きられた経験が、日々、特定の社会的なアクターによって特定の社会的文脈の中で生きられる仕方」 (Valentine, 2007, p. 61) を引き出すための道具として用いられるべきだと主張する (Valentine, 2007, p. 18)。

二つの事例研究が示唆するのは、概念をめぐる議論が、分析者が出会う現象の複雑性に耐え得るように開かれたものとして鍛えられるべきだということである。本論文の今後の議論はそのための道筋を模索する。ひとまずここでは、「セクシュアリティ」概念を開いておくために有効だと思われる、デボラ・キャメロンとドン・クーリックの議論を紹介したい。二人は「セクシュアリティ」という語が、あらゆるエロティックな欲望や実践を含む概念として考えられるべきだと主張し (Cameron & Kulick, 2003, p. xi)、「セクシュアリティ」とは「性的であるあり方 (ways of being sexual)」 (Cameron & Kulick, 2003, p. 8) であるとする。

この表現は、「セクシュアリティ (sexuality)」という英語の語が、「性的である (sexual)」という形容詞の名詞形であることを思い起こさせる。次節ではそれを念頭に、「性的である」ことの定義の試みについて議論を進める。

3 要素列挙型定義と相対主義的定義

「セクシュアリティ」概念の定義をめぐっては、大きく分けて二つの異なる姿勢がとられてきたと言える。一つが客観的に要素を同定しようとする「要素列挙型定義」であり、もう一つは「要素列挙型定義」の限界を受けた「相対主義的定義」である。

まず前者の「要素列挙型定義」は、「セクシュアリティ」に含まれる要素を列挙して定義しようとする試みであり、例えば「性器結合に直接に関連し、それに向けて進行し、その代替となり、あるいはそれから結果する対人行動を意味する」(松園, 1987, p.7) というものである。しかし、ある概念に含まれる要素を同定し、あらゆる事例に適用できる普遍的な定義の構築を目指す目論見は厳密には成功し得ない。上の定義は「性器結合」を中核に置き、それと関連する要素を「セクシュアリティ」の構成要素として同定していくが、そこから外れる事例はいくらでも指摘できる。自慰や、性器結合を目指さず終わる二者間の愛撫行為は果たして性器結合の代替なのか。また、裸の人間のイメージを「エロティック」であると感じることは、果たして性器結合を夢想してのことなのか。さらに、数々の歴史学的、社会学的研究において指摘されるように、「セクシュアリティ」を認識可能な領域として捉える発想自体、近代の西欧世界において誕生した歴史的・地域的に特殊なものなのであり (cf. Foucault, 1976/1986, p. 89; Weeks, 2003, p. 16)、その特殊性を認識せず、中立的な概念定義が可能だと考えることには問題がある。

これらの問題を受けて登場するのが、もう一つの「相対主義的定義」である。例えば上野千鶴子は、「セクシュアリティ」は「無定義概念」であると宣言した上で、「セクシュアリティ研究とは、人々が『セクシュアリティ』と呼び、表象するもの、そしてその名のもとで行為するしかたについて研究する領域である」(上野, 1996, p. 6) と述べる。概念の客観的定義づけがおおよそ不可能であることを踏まえた上で、「何がセクシュアリティに含まれるのか」の判断の主体を分

析者ではなく、研究対象となる人々の側に帰属させるのである。「相対主義的定義」では、上で指摘した「要素列举型定義」の問題点は解消される。特に「性」に関して共有されている価値観の傾向性が違う状況での事象を解釈する際には、分析者自身が性的であると考えた事象が相手にとっては性的であるとされない、という事態を想定しておく必要がある。しかし「相対主義的定義」にも限界がある。ここからはそのことをある一つの事例を通して考えてみる。

人類学者のギルバート・ハートは、ニューギニア東山岳地帯のサンビアの人々の間で行われている少年たちの通過儀礼を「儀礼的同性愛 (ritualized homosexuality)」と名づけ、民族誌的考察を行ったことで知られている (Herdt, 1984; 1994/2011; 1997/2002)²。簡潔に説明すれば、年長の少年が性器を、通過儀礼の対象となる少年の肛門や口へ挿入する行為を伴うもので、年長の少年から年少の少年への精液の受け渡しが重視される (Herdt, 1984, p. 173, 188; 1994/2011, p. 288)。同性間の性行為と捉え得る行為が少年の男性性を増強し、少年がその後女性と異性愛的関係を営む上での生殖能力を保証するという発想は、性の「文化的多様性」を鮮やかに示す事例として驚きをもって受け止められた。しかし同じく人類学者であるデボラ・エリソンはメラネシア地域研究の観点からハートの議論を批判する。エリソンは、「同性愛者」の自認がない人々の行為について「同性愛」という語を使うことが不適當であるのに加え、メラネシアで広く見られる、サブスタンス (血液、精液、母乳などの身体を構成する物質や、食物など) のやり取りが行われる儀礼との関連性ゆえ、当の行為を「性的」と見なすことにも否定的である (Elliston, 1995, p. 851, 858)。しかしエリスンの批判に関して人類学者のステファン・マレーは、男性同士の性行為を「脱性化」する議論だとして強く批判している (Murray, 1997, p. 4)。

この事例が示唆するのは、ある特定の現象を「性的である」と見なすかの判断が、非常に困難であるという (当たり前だが重要な) 事実である。エリスンの批判は、人類学者によってなされた「性的である」という価値判断をサンビアの人々に適用することに疑問を投げかけた点で、まさに上で紹介した「相対主義的

² 後述する批判を踏まえたのか、1994年の論文でハートは「少年の精液受け渡し儀礼 (boy-inseminating rituals)」という、より中立的な名称の方が好ましいと述べている (Herdt, 1994/2011, p. 288)。

定義」の妥当性を裏づけているように思われる。しかし、エリントンが少年の通過儀礼をメラネシアに広く見られる儀礼実践の一つとして理解し、それゆえ性的だとは言えないと主張する時、その根拠にはサンビアもしくはメラネシアの「文化」なり儀礼体系が想定されているが、仮に当該儀礼がサンビアの集団的価値観において性的な意味を付与されていなかったとしても、個々の参加者が当の行為を性的なものとして経験している可能性は否定し得ない。さらに、たとえ当事者が当該行為を儀礼だと言明していたとしても、もしくは「性的」に相当する観念がサンビアの人々の中に存在しない状況を想定したとしても、われわれが各々「性的だ」として経験するのと類似した感覚をサンビアの人々が経験していないと結論づけることはできない。実際ハートの記述からは、個々人の感情、経験の幅が垣間見える。儀礼における恐怖を語る少年がいる（Herdt, 1997/2002, p. 190）一方で、儀礼後私的に同性との「性行為」を行う男性が少数ながらいること、そうでなくとも儀礼で出会った年上の青年を愛着とともに思い出す者がいることをハートは紹介している（Herdt, 1997/2002, pp. 192-194）³。少なくとも、集合的に共有される規範や価値観のようなものを「当事者の主観」とし、そのみを根拠としてある行為が性的であるか否かを判定することは容易にはできないと考えるべきである。

「相対主義的定義」は、「人々が性的だとみなすもの」といった形で「セクシュアリティ」概念の内実を定義しようとするものであった。それは、分析者の側の「セクシュアリティ」概念に関する前提を相対化し、人々の言説に寄り添う形で「性的」の意味内容を検討する点では、きわめて正当かつ合理的なものである。しかしそこにはしばしば、集合的に共有された言説実践、もしくは言明化される限りでの「性的な」現象に焦点化する志向性が見られる。だが果たして、セクシュアリティ研究の探究の対象は、人々が集合的価値観に照らして明確に「性的である」と名づける実践に限定されるのだろうか。本節では「セクシュアリティ」概念への向き合い方を二つ——「要素列挙型定義」と「相対主義的定義」——に分類したわけであるが、次節以降はこの両者の限界を乗り越える方策を模

³ ここでは決して、恐怖と快楽・愛着を対比し、恐怖の問題を「性的であること」と対置しているわけではない。それは同じ人間の内部でも変化を伴いつつ同時に経験され得るし、恐れや感情や支配関係は、むしろ「性的であること」における中心的な問題だろう。

索する。第4節ではまず、しばし議論の射程を広げ、研究の対象となる人々の実践と様々な関係を持ちつつ展開される、人文・社会科学の学術的实践における概念のあり方について、より掘り下げて考えてみたい。

4 概念の動き、拡張について

社会学者の古川直子は「セクシュアリティ」という語が、「経験を解釈してゆく枠組みと、その枠組みによって解釈される経験の両方を指すという混乱を抱えている」（古川, 2009, p.25）と指摘している。前節で挙げた「要素列挙型定義」はあくまで枠組みによって解釈される内容を列挙し精査することに照準を合わせる一方、「相対主義的定義」は「セクシュアリティ」という概念が時代的、地域的に特有の解釈枠組みであることを強調していると言える。古川が「混乱」と呼ぶのは、この両者の概念定義の仕方の間での揺れ動きと考えることもできる。しかし、果たして古川の言う「混乱」は否定的に捉えられるべきものなのだろうか。むしろ、解釈枠組みとそれが指示する内容とが「混乱」し同時に構成され変容するという事態を、肯定的に捉え利用することこそが、前節で紹介した二つの道筋を乗り越えることにつながるのではないか。

まずは科学哲学者イアン・ハッキングによる議論を参考にしたい。ハッキングは概念が形成され、生きる社会的状況をマトリクスと呼び、マトリクスの中で「分類」と「分類される存在」とが相互作用する概念や観念（idea）を、「相互作用種」と呼ぶ（Hacking, 1999, p. 31-32）⁴。概念はマトリクスの中で生まれ、変容する。また同時に概念は、マトリクスの編成や、その概念の下に記述される存在に影響を及ぼす。さらにハッキングは、「何かが社会的に構成される」と言われる時に、「ある種のモノと、そのモノが想起される時の観念」とがしばしば混同されがちであることを指摘した上で、「分析哲学者としては、こうした状況を避けるのではなく、診断することが大切である」と述べる（Hacking, 1999, pp. 28-29）。「セクシュアリティ」概念について「枠組み（概念自体）」と、それによって

⁴ 「相互作用種」の例としてハッキングは、「女性難民」や「肥満」などを挙げている（Hacking, 1999, p. 32, 34）。例えば「女性難民」という概念は、様々な組織、活動家、弁護士、法、国境、パスポート、インフラなどの、人、モノ、制度を含む総体としてのマトリクスの中に存在している（Hacking, 1999, p.10）。

解釈される「経験」とがしばしば混同されるのは、概念とその記述対象たる「性的なこと」が共に、学術的实践と（その記述対象となる）人々の実践とが合わさって構成されるマトリクスの中で変動しているからである。では、分析者はそれにどのように向き合えば良いのか。

ここで人類学者マリリン・ストラザーンによる議論が示唆的である。1988年の『贈与のジェンダー』でストラザーンは、メラネシアの人々に関する人類学的研究によって、西欧近代的思考の内部に「コントラストを生み出す」(Strathern, 1988, p. 16) ことを目指す。ストラザーンはメラネシアの人々の社会的実践について、人類学者が持つ「社会」や「個人」などの西欧近代的な諸概念を用いて記述することに伴うずれや非対称性に注意を促しつつも、記述の営み自体を否定はしない(Strathern, 1988, pp. 11-12)。観察者の側の外在的な概念を、記述対象となる人々の土着の概念に置き換えれば事足りると考えるのではなく、西欧近代的な諸概念を用いた説明の様式が、メラネシアの人々についての記述に適用された時に、いかに「作動する」のかを「可視化」するべきだとストラザーンは提起する(Strathern, 1988, p. 7)。そしてその結果、「われわれ」の手持ちの概念の元の意味が予期せぬ方向に拡張することを狙うのである(Strathern, 1988, pp. 17-19; cf. 里見 & 久保, 2013, p. 268)。さらにストラザーンは、ある人類学者の著作が手持ちの概念と自身のフィールドの事象（調査対象）とのずれを内包しながら記述を生み出し、そしてその著作とフィールドの事象とのずれの認識が別の新たな記述を生み出すというように、知が連鎖し変容しながら産出されていくという認識を示している(Strathern, 1988, p. 19; cf. 里見 & 久保, 2013, p. 274)⁵。先立つ記述に連なって別の記述が生まれ、同時にフィールドの事象も変動しつつ徐々に生み出される。ストラザーンは学術的实践とフィールドの事象を含むマトリクスの中での概念の変動を肯定的な契機として捉え、戦略的に利用しようとするのである。

このように学術的实践を、手持ちの概念を不断に拡張する試みとして捉え直すストラザーンの議論は実は、人類学やクィア研究が各々探究してきた方向性と共

⁵ こうしたストラザーンの議論は、フェミニスト的な身体化を通じた「状況化された知(situated knowledge)」の可能性を提唱するダナ・ハラウェイの議論(Haraway, 1988)と直接呼応し合っている。

鳴し得るものである。例えば、ジュディス・バトラーのジェンダーをめぐる議論が、ドラッグ・パフォーマンスが喚起するイメージに着想を得、それを「ジェンダー」概念についての思考に活かしたものであったことを思い起こせばよいだろう (Butler, 1990)⁶。人類学とクィア研究は「他者と共にもう一つの・別の (an/other) あり方を知ろうとする」(Weiss, 2016, p. 635) 営みであり、既存の概念を使いつつその意味をずらし、別様に思考しようとする企てなのであり、「セクシュアリティ」概念についてもそれを試みるべきなのである。

ここで思い起こされるのは、ミシェル・フーコーの『性の歴史』第1巻、『知への意志』における「セクシュアリティ (sexualité)」の概念の用法である。『知への意志』でのフーコーの関心の一つは、「セクシュアリティ」という「認識の領域」(Foucault, 1976/1986, p. 126) を成立させた知と権力の不可分な働きの歴史学的な分析にあったが、フーコーは同著作中、精神分析学者ジークムント・フロイトによる『性理論三篇』に登場する *sexualität* という語の、フランス語訳語としての歴史的背景を持つ *sexualité* という語 (cf. 渡辺, 1986, p.210) を、複数の意味合いを混在させつつ用いている (Foucault, 1976)。実際、日本語訳版では *sexualité* に「性現象」、「性行動」、「性的欲望」などの訳語が当てられており (Foucault, 1976/1986)、読み手はこの語の意味が明瞭に確定されないままこの著作を読み進めることになる。

それは同著作が、「セクシュアリティ」という概念をめぐる探索の試みであることを示している。『知への意志』でフーコーが目指したのは独自の権力論、つまり「法律的権利の表象には還元され得ない」、「新しい権力メカニズム」の分析学を打ち立てる試み (Foucault, 1976/1986, p. 116) であったが、権力は「セクシュアリティ」に対して外在的に働くのではなく、「セクシュアリティ」に内在し「直接に身体に関係づけられ」(Foucault, 1976/1986, p. 191) るものとして捉えられている。つまり、「セクシュアリティ」は権力の問題に関わると同時に身体の問題に関わるのであり、社会的でありかつ身体的であるという二重性を帯びたものとして考えられていたのである。フーコーは西欧近代における「セクシュアリティ」に

⁶ バトラーのドラッグ・パフォーマンスをめぐる思索自体が人類学者エスター・ニュートンによる著作 (Newton, 1972) に触発されたものである (Butler, 1990, pp. 136-137) ことは、人類学とクィア研究との交差を考える上で非常に興味深いことである。

関する知の生産を分析しつつ、独自に「セクシュアリティ」という言葉を用いることによって、「セクシュアリティ」という概念の意味内容をずらし、拡張し、新たな知の生産を駆動させようとしていたのだ⁷。

5 「セクシュアリティ」概念の拡張へ向けて

第2節でイヴ・セジウィックの議論を紹介したが、セジウィックはこうも述べている。

セックス／セクシュアリティは、存在の、最も親密なものとも最も社会的なもの、最も規定的なものとも最も偶発的なもの、最も身体に根差しているものとも最も象徴に満ちているもの、最も生得的なものとも最も学習されるもの、最も自律的なものとも最も関係的なものという、対立極の間の位置のスペクトラム全体を表し得る。(Sedgwick, 1990, p. 29)

現代のセクシュアリティ研究が様々な事象を記述・分析していく上で、この指摘はきわめて重要である。セジウィックが言う「スペクトラム」において、一方の極には「セクシュアリティ」を個々の身体内部の生理的機能、または個の欲望なり親密性のレベルのみに帰する立場が、もう一方の極には「セクシュアリティ」をあくまで集合的表象や社会的事象としてのみ捕捉せんとする立場が置かれるであろう。ここで重要なのは、セジウィックが指摘するように、「セクシュアリティ」が「スペクトラム」のいずれの場所にも位置づけられ得るということであり、筆者はこの両極の二者択一ではなく、両者を同時に視野に収める議論が必要だと考える。中村美亜が指摘するように、「セクシュアリティ」は「生物学的事象と社会学的事象の交錯するところに」（中村, 2009, pp. 10）生じるのであり、「自然」と「社会」、もしくは「身体」と「言説」などの排他的な分離を前提とする限り十全には捉えがたいのである。では、それに伴う多義性や不確定性を

⁷ 人類学者の里見龍樹と久保明教は、ストラザーンの議論とフーコーの議論とを比較し、両者の議論には、特定の時代、特定の地域に固有の枠組みに「徹底して内在的な記述を通じて分析概念の拡張を試み」、近代的な知のあり方の「内側からその挙動を錯乱させ変更する」ことを企てるという、方法論上の特徴が共通して見られることを指摘している（里見&久保, 2013, p. 279）。

損なわずに「セクシュアリティ」を捉えるには、どうすれば良いのだろうか。

第2節で紹介した引用で人類学者のデイヴィッド・ヴァレンタインは、「我々が『ジェンダー』や『セクシュアリティ』と名づける生きられた経験が、日々、特定の社会的なアクターによって特定の社会的文脈の中で生きられる仕方」(Valentine, 2007, p. 61)に注目するべきであると主張していた。ここでヴァレンタインが述べるように、「セクシュアリティ」という概念を「経験」を指し示す概念として捉えることの可能性について、考えてみたい。そのためにまずはしばしばセクシュアリティ研究を離れ、経験に注目した記述を試みる二つの人類学的議論を紹介したい。

まず、人類学においては人文・社会科学において「経験」に注目することの意義については、「苦しみ」に関するアーサー・クラインマンとジョーン・クラインマンの議論が参考になる (Kleinman & Kleinman, 1991)。二人は人々の苦しみを疾病のカテゴリーに還元する医学的な説明様式も、そして(しばしば医学的な説明様式を批判し)人々の苦しみを集会的な慣習や文化的図式の下で理解しようとする文化論的な説明様式も共に、乱雑さや不確定性を含んだ個人の苦しみについての語りを「脱人間的」で「代替可能な」ものに変換してしまうことを批判している (Kleinman & Kleinman, 1991, p. 280)。そこで二人が提起するのは「人々の間の経験 (interpersonal experience)」を記述する人類学的研究の必要性である。二人は「経験」を「主観的な現象——ある一人の人が『持つ』ようなもの——ではなく、ローカルな世界において共有され、営まれ、人々同士を媒介するような、人々の間の媒体」(Kleinman & Kleinman, 1991, p. 295)として定義し、人類学者はある特定の時点、場所での経験の流れに身を投じる中で、「日常的な状況において問題になっている (at stake) こと」(Kleinman & Kleinman, 1991, p. 277)を、その特殊性と不確定性をできる限り損なわずに捉えるべきだと主張する。クラインマンらは人々の苦しみという現象を、医学のカテゴリーや文化的カテゴリーに還元して理解するのではなく、個人の主観的現象として理解するのではなく、人々の相互作用の中で人々の間に生じる経験として把握することを提起しているのである。

クライマンらは「経験」を人々の間で生起し、人々の間を媒介するものとして捉えたが、その媒介の動きを捉え得るのが、人類学者の箭内匡が「イメージ」の

概念を基に展開している議論である（箭内, 2018a）。箭内は「イメージ」概念を、「識閥下の身体感覚から五感によるイメージを経て言語・数式が生み出す高度に抽象的なイメージまで、雑多なものを雑多なままに内包」（箭内, 2018b, p. 336）し、人間を前提としない「あらゆる『Xに対する現れ』」（箭内, 2018a, p. 22）を把握するための概念として定義する。ここで箭内は「現れ」という、変化（つまり何かがあるに現れるという、変化・動き）を含意する言葉を用いている。例えば我々が本を朗読する場面を考えてみると、まず本の紙面に書かれた文字が我々の視覚的イメージとして「現れ」、そして文字の視覚的情報は声に出すことで音のイメージとして「現れる」。それを聞いた別の人がそれを紙面に書き留めれば、音声的イメージは再び紙面に文字のイメージとして「現れる」。箭内はこの「イメージ」の概念を元に、人類学が対象とするところの我々の生の様々な局面、そして人類学者が行うフィールドワークの過程を、イメージの形を変えた移動の連続として理解していく（箭内, 2018a）。ここで注目すべきは、箭内の「イメージ」の概念が、人間以外の存在も含んだ我々の生の様々な局面をきわめて微細なイメージの変化・動きの集積として動態的に捉えていることである。

箭内は「経験」という語は用いてはいないが、クライマンらが人々の間を媒介するものとして見出した「経験」は箭内の議論を通して見ることによって、（人間以外の存在も含めた）様々な存在の間でのイメージの移動、もしくは現れとして、より微細に、かつ動きを伴った過程として理解することができる。我々が日々生きている生活世界は、イメージの移動としての経験の無数の集積として営まれている。そして生身の人間として人々の営みに参与したり、分析、記述を行う（特に人文・社会科学の）研究者の実践もこうした生活世界に埋め込まれている。我々の生、そしてその中に埋め込まれながら展開される学術的実践を「経験」（もしくは「イメージ」の移動）の集積として理解することによって、「自然／社会」、「身体／言説」、「人間／非人間」などの分離を前提とすることなく、その場その場の個別性に即して包括的に把握することが可能になる。

では、こうした「経験」への視座を「セクシュアリティ」概念をめぐる議論にいかにかかすことができるだろうか。ここで提起したいのは、本節冒頭の記述でセジウィックが「対立極の間の位置のスペクトラム全体」を表し得ると述べたような「セクシュアリティ」を、人間も非人間も含んだ様々な存在を媒介する経験

を指し示す概念として捉えることによって、「スペクトラム全体」を把握可能な概念として活用できるのではないかということである。第2節で取り上げたルービンの「性の階層化」の議論が（狭義の）性的指向のみならず、パートナーの年齢差や性行為の行われる場所、道具の使用の有無も含めた、多岐に渡る差異を視野に収めていたことを思い出せば、セクシュアリティの問題はモノや空間、人間の間のような差異の軸の組み合わせによって生まれる、その場その場の即興性を含んだ経験の問題であると考えられる。また、第3節で紹介したニューギニア、ザンビアの人々の実践をめぐる議論に関連して「性的であること」の画定が困難だったのも、「性的であること」が集合的な価値観のレベルで決定し尽くすことができず、さらに同じ個人においても時と場所によって変動する、経験の次元で人々に現れてくるものだからである。さらに第4節で述べたような概念の拡張も、学術的実践が我々の生に埋め込まれ、我々の生の経験の中で営まれており、概念はその中で生きているからこそ、可能になるのである。以上での議論を踏まえつつ最後に、「セクシュアリティ」を経験として捉える可能性について示唆深いと考えられる近年のいくつかの研究を紹介したい。

人類学者のレイチェル・スプロンクはセクシュアリティ研究において身体感覚的な経験に注目する必要性を強調し、ケニアのナイロビでのフィールドワークを基に、都市部の中上流階級の若者たちにとって身体的快楽や水平的な性愛関係を結ぶことが持つ意味に注目している（Spronk, 2014）。スプロンクが紹介するのは「私は自分の体を楽しむことを知って、それが私にとって大切だと気づいた」などと語る女性や、「（良い性行為は）自分の存在の隅々にまで流れ込む至福の感覚なんだ」と熱っぽく語ったり、女性に快楽を与えることの重要性を力説する男性たちの声である（Spronk, 2014, pp. 14-15）。スプロンクは、性関係における身体的な感覚の経験やその探求が、若者たちの自己形成・他者認識の重要な要素となってかれら同士を媒介し、かれらの中で（集合的な）スタイルのようなものが生み出されていく様態を描き出している。

しかしセクシュアリティ研究の探究の対象は、（狭義の）性行為の局面に限られるわけではない。例えば人類学者の砂川秀樹は日本の新宿二丁目でのフィールドワークに基づき、特に「ゲイメンズバー」と砂川が呼ぶ店舗で客や店員の間で交わされるコミュニケーションのあり方に注目しつつ、「セクシュアリティ」の

定義を提案している。

人や物質に直接的に惹かれ、その存在から快感や快楽を得ること、与えることを目的の一つとして、接近／接触する行為（接近／接触はかならずしも物理的な意味だけに限定されない）であり、そのことによって築かれる関係性。それをめぐる欲望、イマジネーション、意味づけ、解釈、利用。（砂川，2015, pp. 320-321）

この定義は、人間同士の物理的接近に限らず、人間でない存在に惹かれる経験や、メディアを通じた体験や空想の中での経験など、様々な異なる存在が「接近」する経験を含むものとなっている。特に、様々な存在の接近という経験に注目することによって、「セクシュアリティ」に関わる存在を人間のみに限定する思考を見直す可能性ももたらされる。

例えばメディアを介した経験の特殊性、我々の生におけるメディアの影響力について思索する可能性が開ける。第2節で紹介したバンコクのゲイ男性の事例のように、メディアを通して地理的な障壁を越えて伝わる映像や情報が強い魅力を伴って経験され得ることも、現代の急速に変化するメディア状況においては見過ごすことはできない。また、人間以外の生物の世界に目を向けることもできる。例えば、花と昆虫との、蜜や色、触覚を通じた誘引・接触の経験、さらにはそれらの生物に時に直に触れ、観察を試みる生物学者をも含んだ異なる存在が関わる局面を「情動のやり取り」として捉える試み（Hustak & Myers, 2012）や、人間でない生物の、生殖に限られない接触行動や種を超えた共生関係を「生物学的なクイア」として捉える試み（Hird, 2009）は、セクシュアリティ研究の地平を拡張し、豊かにする可能性を持っている。

「セクシュアリティ」を経験として捉えるとは、多様な形態をとりつつ、瞬間瞬間、その場その場で様々な存在に対して現れる種々雑多な現象が、「性的である」という感覚・意味を帯びるに至る局面を包括的に、「セクシュアリティ」概念の下で把握するということである。特定の主体、対象、形態を前提とせず、（研究者自身を含めた）様々な存在の内部や、存在と存在との間で、一瞬一瞬の状況に応じて現れたり現れなかったりする経験を、その都度、その多義性や複雑

性をできる限り縮減しない形で記述に反映させるための道具として、「セクシュアリティ」概念は用いられ、更新されていくべきなのである。

6 おわりに

本論文は、学術的実践を含む人々の実践において概念が持つ働きを重視し、「セクシュアリティ」という概念を「生きた」ものとして扱いつつ、概念を創造的に開き、拡張するための方策を模索してきた。第2節では「ジェンダー」や「性的指向」の概念との関係から、第3節では「性的なこと」の意味内容をいかに定義するかという観点から、本論文が取り組む問いの内実を明確化した。そして第4節では人類学とクィア研究が潜在的に持つ、概念の創造的な拡張の試みにヒントを得た。最後に第5節ではいくつかの研究事例を紹介しつつ、「セクシュアリティ」を「経験」として捉えることに、概念の創造性を活かす糸口を見出した。

「セクシュアリティ」という概念は、様々な研究や人々の日常的な実践に少なからぬ影響を持ち続け、そして同時に、人々の実践の中で概念の意味内容は、時と場所によって異なる形で変容している。であるとすれば、セクシュアリティ研究において「セクシュアリティ」概念とは、常に新たに見出され、問い直されるべきものなのであり、われわれは概念の変動に突き動かされて知を生み出し続けるのである。

References

- Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York: Routledge.
- . (1994). Against proper objects: Introduction. *differences: A Journal of Feminist Cultural Studies*, 6(2-3), 1-26.
- Cameron, D., & Kulick, D. (2003). *Language and sexuality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Elliston, D. (1995). Erotic anthropology: “Ritualized homosexuality” in Melanesia and beyond. *American Ethnologist*, 22(4), 848-867.
- Foucault, M. (1976). *Histoire de la sexualité Vol. 1: La volonté de savoir*. Paris: Éditions Gallimard.
- Foucault, M. (1986). 『性の歴史 I 知への意志』(渡辺守章, Trans.). 東京: 新潮社. (Original work published 1976)
- Hacking, I. (1999). *The social construction of what?* Cambridge, Massachusetts & London: Harvard University Press.
- Haraway, D. (1988). Situated knowledges: The science question in feminism and the privilege of partial perspective. *Feminist Studies*, 14(3), 575-599.
- Herdt, G. (1984). Semen transactions in Sambia culture. In G. Herdt (ed.), *Ritualized homosexuality in Melanesia* (pp. 167-210). Berkeley: University of California Press.
- Herdt, G. (2002). 『同性愛のカルチャー研究』(黒柳俊恭 & 塩野美奈, Trans.). 東京: 現代書館. (Original work published 1997). *Same sex, different cultures: Exploring gay and lesbian Lives*. Boulder: Westview Press).
- Herdt, G. (2011). Notes and queries on sexual excitement in Sambia culture. In A. Lyons & H. Lyons (Eds.), *Sexualities in anthropology: A reader* (pp. 284-295). Chichester: Wiley-Blackwell. (Originally published 1994)
- Hird, M. (2009). Biologically queer. In N. Giffney & M. O’ Rourke (Eds.), *The Ashgate research companion to queer theory* (pp. 347-362). New York: Routledge.
- Hustak, C., & Myers, N. (2012). Involuntary momentum: Affective ecologies and the sciences of plant/insect encounters. *differences: A Journal of Feminist Cultural Studies*, 23(3), 74-118.
- Kang, D. (2017). Eastern orientations: Thai middle-class gay desire for “white Asian.” *Culture, Theory and Critique*, 58(2), 182-208.
- Kleinman, A., & Kleinman, J. (1991). Suffering and its professional transformation: Toward an ethnography of interpersonal experience. *Culture, Medicine and Psychiatry*, 15(3), 275-301.
- Martin, B. (1994). Sexualities without genders and other queer utopias. *Dialectics* 24(2-3), 104-121.
- Murray, S. (1997). Explaining away same-sex sexualities: When they obtrude on anthropologists’ notice at all. *Anthropology Today*, 13(2), 2-5.
- Newton, E. (1972). *Mother camp: Female impersonators in America*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- Rubin, G. (1993). Thinking sex: Notes for a radical theory of the politics of sexuality. In H.

- Abelove, M. A. Barale & D. M. Halprine (Eds.), *The lesbian and gay studies reader*. (pp. 3-44). New York: Routledge. (Originally published 1984)
- Sedgwick, E. K. (1990). *The epistemology of the closet*. Berkeley: University of California Press.
- Spronk, R. (2014). Sexuality and subjectivity: Erotic practices and the question of bodily sensations. *Social Anthropology*, 22(1), 3-21.
- Strathern, M. (1988). *The gender of the gift: Problems with women and problems with society in Melanesia*. Berkeley: University of California Press.
- Valentine, D. (2007). *Imagining transgender: An ethnography of a category*. Durham: Duke University Press.
- Weeks, J. (2003). *Sexuality*. (2nd Edition). London: Routledge.
- Weiss, M. (2016). Always after: Desiring queerness, desiring anthropology. *Cultural Anthropology*, 31(4), 627-638.
- 上野千鶴子. (1996). 「セクシュアリティの社会学・序説」. In 井上俊, 上野千鶴子, 大澤真幸, 見田宗介 & 吉見俊哉 (Eds.), 『岩波講座現代社会学10 セクシュアリティの社会学』 (pp. 1-24). 東京: 岩波書店.
- 里見龍樹., & 久保明教. (2013). 「身体の産出、概念の延長——マリリン・ストラザーンにおけるメラネシア、民族誌、新生殖技術をめぐって」. 『思想』, 1066, 264-282.
- 砂川秀樹. (2015). 『新宿二丁目の文化人類学——ゲイ・コミュニティから都市をまなぐす』. 東京: 太郎次郎社エディタス.
- 中村美亜. (2009). 「セクシュアリティの何が問題か? ——システムを有機化させるコミュニティ・ダイナミクスの活用へ」. 『論叢クィア』, 2, 7-28.
- 古川直子. (2009). 「『セクシュアリティ』概念再考——精神分析の導入に向けて——」. 『ソシオロジ』, 54 (1), 19-35, 181.
- 松園万亀雄. (1987). 「社会人類学における性研究」. In 宮田登 & 松園万亀雄 (Eds.), 『特集＝性と文化表象』. (pp. 6-20). 京都: アカデミア出版会.
- 箭内匡. (2018a). 『イメージの人類学』. 東京: せりか書房.
- 箭内匡. (2018b). 「過去・現在・未来」. In 前川啓治, 箭内匡, 深川宏樹, 浜田明範, 里見龍樹, 木村周平, 根本達 & 三浦敦. 『21世紀の文化人類学——世界の新しい捉え方』 (pp. 319-347). 東京: 新曜社.
- 渡邊守章. (1986). 「訳者あとがき」. In M. Foucault (Author), 『性の歴史 I 知への意志』 (渡邊守章, Trans.) (pp. 204-217). 東京: 新潮社.

Abstract

Thinking about/with the Concept of “Sexuality”

Yusuke OMURA

This paper attempts to explore possibilities of how to utilize the concept of “sexuality” in academic analyses and descriptions. From the perspective of anthropology, the author seeks a way of using the concept for the purpose of grasping the fluidity and poly-semantic nature of people’s everyday practices.

The second section of this essay discusses the relationships between the three concepts of “sexuality,” “gender” and “sexual orientation.” By examining Gayle Rubin’s influential essay “Thinking Sex,” the author emphasizes that questions related to the concept of “sexuality” should not be limited to that of “sexual orientation” in the narrow sense of the word.

The third section focusses on attempts to define the meaning of “sexuality” more broadly as a concept of being sexual. The author classifies two types of attempts, namely the “element enumerating definition” and a “relativistic definition,” and goes on to examine an anthropological dispute over the question whether a certain phenomenon was sexual or not, in order to point out the difficulties of deciding whose definition of “sexual” counts, that is, who the subject of that decision should be.

Section four, then, deals with the function of concepts used within academic texts to describe people’s everyday practices. Making use of anthropologist Marilyn Strathern’s insights, who re-conceptualized anthropological research as a moment for extending the meaning of existing concepts, the author points out that both queer studies and anthropology are fields in which attempts have been made to update existing concepts and terminology in unprecedented ways.

In the fifth and last section, the author suggests possible ways of academic thinking “together with” the concept of “sexuality.” The author argues that in

order to grasp what it means to be sexual we need to constantly update and expand our conceptualization of “sexuality” and understand it as momentary, often short-termed, fluid “experiences” within oneself and between oneself and other beings.

Keywords:

sexuality, conceptualization, anthropology, queer studies, experience